

[12]

| | |
|------------|-------------------------------------|
| 氏名 | まつもと のぞみ 松本望 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 文博第 235 号 |
| 学位授与の日付 | 平成 27 年 3 月 31 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 学位論文題目 | 近世大坂における出版文化と人的交流 |
| 論文審査委員 | 主査教授 藪田 貫 副査教授 大谷 渡 副査教授 山本 卓 |

論文内容の要旨

松本望の論文「近世大坂における出版文化と人的交流」は、以下の構成をとる。

序章「近世大坂の出版文化をめぐる研究状況」では、近世大坂における出版文化と漢学塾・文人社会に関する研究史を概観し、書籍を史料とする研究の課題を述べる。

第一章「近世大坂新町遊郭と遊女名簿—「大坂新町遊女名譜つましるし」の改板をめぐる—」では、寛政 10 年（1798）に公刊、万延元年（1860）まで改板が繰り返された、新町遊廓の遊女名寄『大坂新町遊女名譜つましるし』について改板の変遷を分析することにより、不特定多数の読者の質の変化を探る。

第二章「茨田家に残る大塩中斎著書の分析」では、門真三番村の地主豪農であった茨田家に残る蔵書のうち、大塩中斎（平八郎）の著書を分析し、大塩事件に参加し獄死に至った茨田郡士が大塩と関係を深めていく経過が表れていることを示す。

第三章「天保期大坂代官と懐徳堂の邂逅」では、天保期に大坂代官を勤めた竹垣直道が懐徳堂教授・並河寒泉から受けた『逸史』・『論語』の出講について検討する。『逸史』は懐徳堂学主の中井竹山が著した徳川家康の一代記であり、当時は写本であったが、『逸史』の入手を含め、大坂に赴任してきた大坂代官が懐徳堂で学ぶに至る要件や、懐徳堂による出講を求めた理由について論じる。

第四章「天保期大坂代官の詠歌」では、前章でも取り上げた竹垣直道が、詠歌の贈答や歌集の貸借を通じて行った交流について述べる。

第五章「懐徳堂により『逸史』の出版」では、懐徳堂が『逸史』を公刊する事例を取り上げる。『逸史』は寛政 11 年（1799）の幕府への献上以降、天保 13 年（1843）の幕府官許、嘉永元年（1848）の公刊まで約 50 年かかっている。その間、幕府・書肆・懐徳堂の三者が『逸史』をどのように取り扱い、『逸史』がどのような経緯で公刊に至ったかについて論述する。

第六章「広瀬旭荘による広瀬淡窓『遠思楼詩集』初編の出版—広瀬淡窓・旭荘兄弟の日記を通して—」では、広瀬旭荘が九州日田の咸宜園の学主で兄でもある広瀬淡窓の漢詩集『遠思楼詩鈔』を公刊する事例を取り上げ、地方の文人が漢詩集を大坂で公刊する際の、

文人や書肆の動向について論述する。

終章「近世大坂における出版文化と人的交流の総括と展望」では、本論の叙述を総括し、「書物が作者・書肆・読者の意図を探る史料として有用」であること、武士を含む文芸環境の解明が課題であることを指摘する。

論文審査結果の要旨

近年、これまでおもに国文学の分野で扱われていた江戸時代の出版ならびに出版物に関する研究が、日本史の分野でも活発に行われるようになってきている。本論文序章で、その研究状況が整理されているが、江戸時代中期になって作者(A)・書肆(書物商B)・読者(C)という関係が、幕府の出版規制のもとで確立していたことが社会的背景にある。

それを前提に、①作者サイド(A)に、近世後期に隆盛をみた漢学塾—懐徳堂・咸宜園・洗心洞などを位置づけ、その上で②塾のテキストが写本、家塾版、公刊本という三つのスタイルをとることに注目し、その異同をテキストに即して明らかにするとともに、③それぞれのスタイルのテキストの意味を究明しようとしたことに、本論文の最大の特徴がある。大塩中斎の洗心洞を論じた第二章、懐徳堂を扱った第五章、咸宜園と広瀬旭荘・淡窓を扱った第六章がそれに相当し、論文テーマの「出版文化」を構成する。

第二章では、大塩門人の茨田郡士の家に残る蔵書の中に、大塩の著書が、家塾本と公刊本がそれぞれ残っていることに着目し、家塾本への書込みから、師である大塩への傾倒が天保5年末を境に深まることを主張する。結論は推測の域を出ないが、筆者が、写本・家塾版・公刊本という三つのスタイルに着目する視点を獲得した最初の論文として意味がある。一方、筆者が写本の価値に着目する契機を得たのは、懐徳堂中井竹山の著作「逸史」と、その写本を求める大坂在勤武士たちの姿を追った第三章である。こうして写本・家塾版・公刊本という三つのスタイルに着目する筆者の視点の確立が跡付けられ、本論文の中心である第五章と第六章に至る。

第五章の主題である懐徳堂については優れた先行研究があるが、「逸史」を求める武士の姿を入れることで、幕府の「学校」とされた懐徳堂が、その著作権を守るべく写本にこだわったことを、残された写本を子細に検討することで明らかにしたことは、武士たちに対する塾主の出講という事実とかかわってきわめて興味深い指摘である。

また第二章・第五章では、書肆(書物商B)である「大坂本屋仲間記録」が活用され、作者(A)と読者(C)の間に介在する書肆から見た写本の価値が語られるが、第六章では広瀬淡窓の詩集『遠思楼詩集』が写本・家塾本をへてさらに公刊本となる過程が、書肆大坂本屋の記録と作者サイドである広瀬淡窓・旭荘の日記で克明に跡付けられ、本論中の白眉となっている。

他方、第三章と第四章では、江戸から大坂に赴任してきた代官竹垣直道という武士を通して、大坂の文人社会の様相が示され、テーマの「人的交流」に該当する。いわば本論の主題の展開の背景を示すものであるが、「竹垣日記」は、筆者らの尽力によってはじめて公刊された史料だけに叙述は新鮮である。出版史の空白を埋めたといえるだろう。

こうして全体の構成を確認してみると、第一章がほとんど意味をなしていないことに気が付くが、書籍を史料として出版と社会の関係を分析する始点として、筆者には不可欠な

論文であったといえよう。

この点に見られるように論文の整合性に若干、問題が残る。また扱った論旨からすれば、テーマに「近世後期」という限定があること、人的交流の中心をなす大坂勤務の江戸武士の背景が明らかでないなど、いくつかの問題点も指摘できるが、博士論文として十分に資質を備えたものであると結論することができる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。